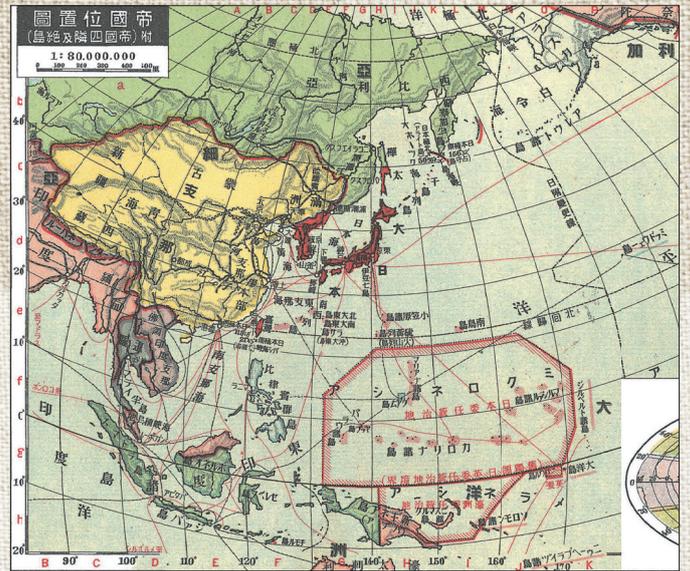


大正時代の
地図帳に見る
近代史

図 大正9(1920)年発行
『帝国地図』守屋荒美雄(帝国書院)
「第一図 帝国位置図」(部分)
61%縮小(距離)



戦争に翻弄された地域

第一次世界大戦が終わった2年後、大正9(1920)年に帝国書院が発行した地図帳『帝国地図』の冒頭に掲げられた「帝国位置図」である(図)。戦死者が850万人を超えた史上最大の戦争で各国は財政人心ともに疲弊し、軍縮機運が高まった。まずは値の張る建艦費用を抑制するため、米英日仏伊の戦勝5カ国がワシントン海軍軍縮条約を図の2年後の大正11(1922)年に締結。この流れは昭和3(1928)年にパリで調印された不戦条約まで続いていく。

日本は日清戦争の勝利で台湾を、日露戦争後に南樺太(サハリン)を獲得し、関東州(中国遼寧省南部)の租借権をロシアから奪う。その流れで大韓帝国を「保護国」とし、明治43(1910)年には併合した。第一次世界大戦で日本は日英同盟に基づく連合国として参戦、負けたドイツが領していた南洋群島のうち赤道以北で委任統治を行うことになる。図は前年にスタートしたばかりの委任統治体制を反映したものだ。赤道付近に見える「旧独領日英委任統治地境界」以南のドイツ領メラネシアと同じく、ニューギニア島北東部はオーストラリアの委任統治領となった。

日本が委任統治に当たった南洋群島は現在のパラオ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国のおおむね3国にわたる広大な地域で、サンゴ礁の島々が点在する領域だ。四半世紀に及ぶ日本統治の影響でシルコ(汁粉)、チチバンド(ブラジャー)、ツカレナオス(ビールを飲む)などの言葉が一部で今も使われているという。第二次世界大戦中の日本軍の絶望的な戦闘を描いた2025年封切りのアニメ映画「ペリリューー楽園のゲ

ルニカー」の舞台はパラオ(図ではパラウ諸島)にある。東側のマーシャル諸島では、日本の敗戦後に領有したアメリカが67回もの核実験を行い、広範囲の住民を被ばくさせた。日本のマグロ漁船「第五福竜丸」もこの時に被ばくしている。

大正9年当時の日本と周辺の結び付き

図の大正9(1920)年といえば日本で初めて国勢調査が行われた年で、GDPも驚くべき勢いで伸びた。陸上交通の主役であった鉄道は旅客貨物ともに目覚ましく輸送量を伸ばしており、新しい交通機関の航空路も登場、昭和4(1929)年には初の「外地」航空路として日本航空輸送が福岡～京城(ソウル)～大連(ターリエン)便を開設している。福岡の飛行場は多々良川の河口付近にあった。この頃から独断専行を躊躇しない関東軍がけん引車となり、満洲事変から傀儡国家「満洲国」の立ち上げまで実に目まぐるしく事態は動く。その後この地域は赤い日本と同系色のピンクに塗られていくが、その後の「帝国滅亡」に至る経緯は周知の通り。悲惨な過去を変えることはできないが、この図は「引き返せたかもしれない時代」を強く示唆しているようだ。

図には現在の学校地図帳と同様、日本の東西南北端が記されている。北端は千島列島のアライド(阿頼度)島の北端、東端は同じく占守島の東端、西端は澎湖諸島の花嶼、南端は台湾最南端の岬・鶯鑿鼻の沖合15kmに浮かぶ七星岩。実は現在の最南端に位置する沖ノ鳥島より北に位置するのだが、当時はまだこの島を正式に領有しておらず、東京府小笠原支庁に編入されたのが大正14(1925)年、初の海図掲載は昭和4(1929)年にずれ込んだ事情がある。



いまお・けいすけ / 1959年生まれ。
出版社勤務を経て地図・地名分野の執筆を始める。著書に『地図帳の深読み』シリーズ(帝国書院)など多数。日本地図センター客員研究員。日本地図学会「地図と地名」専門部会主査。